12. 尚絅の校歌・学院歌

12.1 尚絅女学校校歌

1917(T6)年11月、尚絅女学校創立二十五周年記念祝賀行事が、五日間にわたり盛大に行われた(本資料 p.22-23参照)。初日の11月21日に行われたのは、新礼拝堂兼講堂での夜の音楽会であった。最後を締めくくったのが、生徒一同によって初めて披露された「尚絅女学校校歌」(現在の尚絅学院校歌にあたる)である。この校歌は土井晩翠作詞、佐々木英作曲。あれから百年経った今でも、多くの同窓生に愛唱され歌い継がれてきた名曲である。

「橄欖山の夕暮れの…」と始まる歌詞は、1919(T8)年5月に公にされた土井晩翠の第四詩集『曙光』に収められている。当時、第二高等学校(旧制二高)の英語教授であった晩翠は、彼の教え子たちがブゼルのバイブル・クラスで大きな感化を受けていたことを知っており、ブゼルと尚絅女学校に敬意と期待を寄せていたようである。

一方、作曲を手がけた佐々木英は、兵庫県出身で東京音楽学校(現在の東京芸術大学)甲種師範科の出身であった。佐々木はそこで尚絅女学校の卒業生池田むねと出会う。彼女も同じ甲種師範科で、卒業後仙台に戻り尚絅女学校の音楽教師となる。時あたかも尚絅女学校創立二十五周年記念行事を翌年に控えた時期であった。土井晩翠作詞の校歌の作曲は、池田むねを通して当時作曲活動に力量を発揮していた佐々木英に託されたのであった。

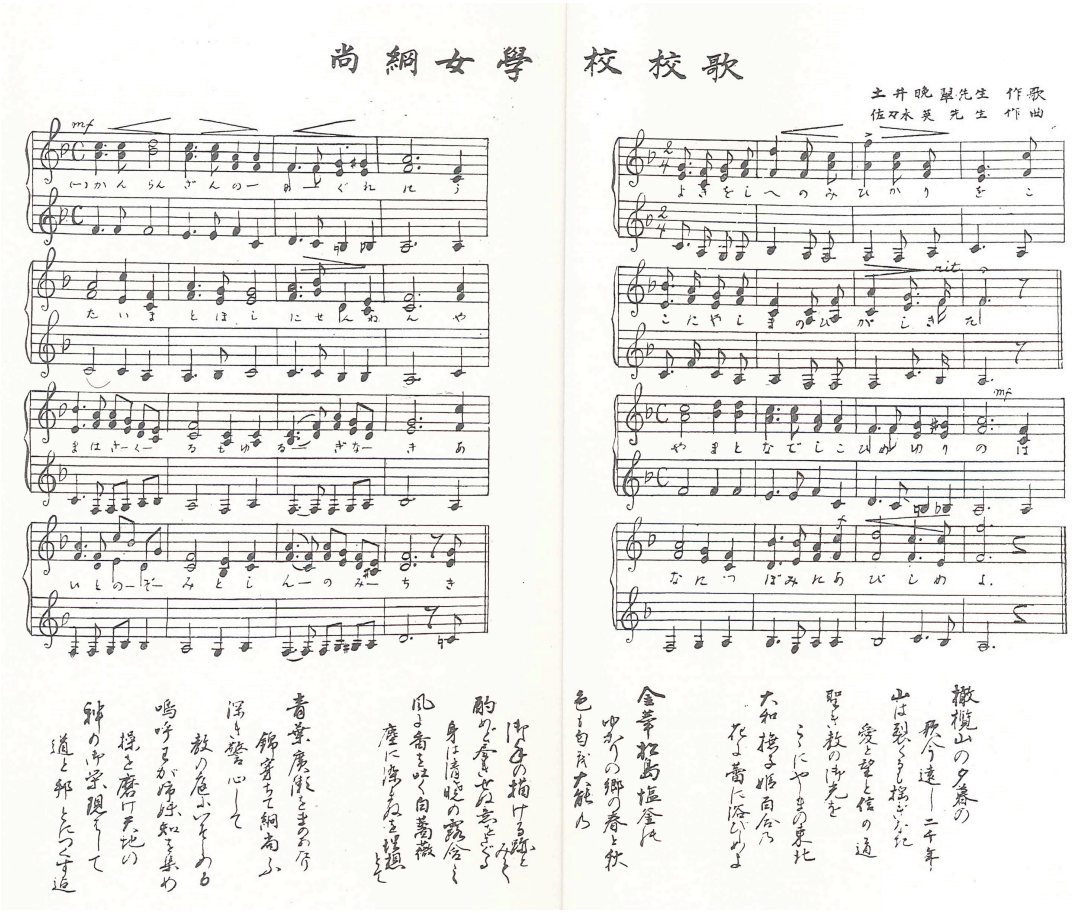
作詞　土井　晩翠 (1871 – 1952)

明治期の詩人、英文学者。仙台の北鍛冶町(現在の青葉区木町通二丁目)に生まれる。本名は土井林吉(つちい・りんきち)。1934(S9)年に「どい」と改称。第二高等中学(後の第二高等学校、東北大学の前身校の一つ)に入学し、吉野作造と交友を結ぶ。その後、1897(M30)年、東京帝国大学英文学科を卒業。在学中から雑誌「帝国文学」の編集委員となり、1899(M32)年、第一詩集『天地有情』を刊行。これが好評を博し、藤村・晩翠時代を形成。「荒城の月」(滝廉太郎作曲)の作詞者として最も広く知られている。1949(S24)年、仙台市初の名誉市民、1950(S25)年には詩人として初めて文化勲章を受けた。

作曲　佐々木　英　(1892 - 1966)

兵庫県印南郡阿弥陀村魚橋(現在の兵庫県高砂市)出身。1916(大5)年東京音楽学校(現在の東京芸術大学)甲種師範科卒業。浜松師範在職中に「青い鳥」を作曲。1922(T11)年上京、1924(T13)年「青い鳥楽譜」を発刊して自作を発表。のち、ビクター、キング、コロムビアなどの専属作曲家として童謡を中心に数千にのぼる作品を残した。主な作品に「月の沙漠」「お山の杉の子」「赤ちゃんのお耳」など。

尚絅の校歌・学院歌



1．　　かんらんざん
　　橄欖山の夕暮の　歌今遠し二千年
　　さ　　ゆる
　　山は裂くるも揺ぎなき　愛と望と信の道
　　きよ　おしえ　みひかり　　ひがしきた
　　聖き教の御光を　ここにやしまの東北
　　やまとなでしこひめゆり　　つぼみ　あ
　　大和撫子姫百合の　花に蕾に浴びしめよ

2．　　さと
　　金華松島塩釜の　ゆかりの郷の春と秋
　　たいのう　み　えが　あと
　　色も匂も大能の　御手の描ける跡とみて
　　く　つき　さぐ　せいぎょう　つゆふく
　　酌めど盡きせぬ意を探る　身は清暁の露含み
　　か　は　しろそうび　ちり　そ
　　風に香を吐く白薔薇　塵に染まぬを理想として

3．　　にしきうが　けいくお
　　青葉広瀬をまのあたり　錦穿ちて絅尚う
　　いましめ　おしえ
　　深き警心して　教の庭にいそしめる
　　ああ　しまい　みさお　みが　あめつち
　　嗚呼わが姉妹知を集め　操を磨け天地の
　　みさかえあら　くに　まで
　　神の御栄現わして　道と邦とにつくす迄